九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[010] 文獻探究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10119

出版情報：文獻探究. 10, 1982-09-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

編集後記にかえて

わが「文献探究」のそもそもの始まりは、決して、研究論文を以て学界にうって出よう、などという大それたものではなかった。いま探している本とか売りたい本、あそこの古本屋にこんなものが廉く出ていた、とか、どこそこの図書館で新資料らしきものを見つけたが専攻外のこととて手も足も出ず帰ってきた、とか、そんな類いのことを仲間うちだけに知らせる、いわば九大国文科研究室内の情報誌のつもりで出発したのであった。「文献探究」という立派な誌名がいつごろできたか、よく知るところではないが、もしこの段階ですでに用意されていたとするなら、「探究」の意味するところは、その程度のものであったのだ。

わが「文献探究」が独り歩きを始めたのはいつごろのことか。学界時評で採り上げられたり、見知らぬ人から購読の申し出があったり、学界の二次会で話題にのぼったり、もはやタウン誌的発想ではすまなくなっていたのである。驚くなかれ（と言ったところで驚くほどのことではないが？）、かの国文学研究資料館では、所蔵逐次刊行物全二、四五〇タイトル中、最近号が開架される重要誌六〇〇タイトルのうちにわが「文献探究」も入っているのである。これはひとえに、毎号すすんで寄稿して下さった今井・中野の両先生、および物心両面にわたって応援してきて下さった諸先輩、さらには毎号きちんとお金を払って下さる定期購読の人たちの力に拠ること言うまでもない。おまけに、森銑三・市場直次郎といった、われら会員とは直接関係をもたない高名な先生からまで玉稿を戴くという栄に浴することができ、いやがうえにもわが「文献探究」の名を高からしめる結果と相なった。そこであとはおのずから、われわれの努力、ということになるのである。

わが「文献探究」はいちおう会員制となっているが、ゴルフのそれのごとく閉鎖的のものではない。広く募る体制は従前からあったのである。「原稿募集」と書いてただちに原稿が集まるなどと考えるのはかいかぶりも甚しいが、しかし、「拙いものですが」という謙譲の美徳も、これまたわれわれにとってなんの役にも立たない御題目ではある。

わが「文献探究」も今号で満五年である。この五年間の足跡が実のあるものであったかなかったか、その結論は、恐らくこれからさきの五年間にあるのではないか、という気がする。

（白石記）